末黒野

すぐろの

6月号（通巻814号）

末黒野　平成二十六年六月五日発行　第六十九巻第六号（通巻八一四号）

うららか

小川玉泉

戸を叩く夜風も春の気配かな

紅覗く万蕾苑の枝垂梅

良き目覚め春曙の鳥の声

緋桜と隣りて競ひ幣辛夷

市中にほぐるる河津桜かな

うららかやピエロとことん無言劇

妻の名を墓碑に加へぬ匂鳥

神鏡にくつきり映り花の枝

庭桜手を取りて見し妻あらず

塗替へし屋根の緑へ散るさくら

風鐸に触るるばかりや山桜

自らの走り根に溜め花の塵

悼む　小倉正穂氏

ゆつくりと彼岸桜をご覧あれ

蜷の道

松本三千夫

本棚に飾る二寸の木彫雛
まだ固き港の風や初蝶来
水温む池の飛石不揃ひに
花馬酔木推せば鉄扉の音重く
川幅を使ひ余せり蜷の道
交はるも交はらざるも蜷の道
薔薇の芽や已に人刺す棘持ちて
ローマ字の表札の門花馬酔木
境内は駅へ近道土佐水木
三月の港のまぶしカプチーノ
春愁や押せぱ玩具のパンダ鳴き
兄逝(悼 小倉正穂詩兄)けり万朶のさくら間に合はず

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

鄙の宮

黒滝志麻子

寒明けや木桶に水の満つる音
石くれとなりし道標春立てり
白ありてこその紅梅鄙の宮
靴底につく藁しべや梅真白
ことなきを得たる落馬も春の景
なじみたる岩の色せり焼さざえ
椨の芽や水門出づる船の笛
屋根替の眉ゆたかなる漢かな
一薬に今日もことなし牡丹の芽
花愛でず逝かれし君や涅槃西風

悼　小倉正穂さん

金婚

田中臥石

春泥を跳び来て少女胸隆し
春光の真砂女句碑抱く安房の海
花菜摘む岬の鳶の弧を追ひつ
光りつつ上総小湊若布刈舟
観梅に従きて遅るる女坂
浪切の不動の磴や梅明かり
娘持ち来る雪害の葉玉葱
春蘭や金婚の妻六十九
外国の旅は適はず木の芽和
海光の彼岸桜へ十重二十重

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

春の雪

菅野日出子

寄席を出て池畔の屋台冴返る
薄氷の揺蕩ふ流れ錦鯉
雪解けの流れの早し石菖藻
料峭や小鷺の冠羽吹かれ佇ち
堂裏の枯山水や雪しづり
透析の友を気遣ひ春深雪
シャベルもて挑みし春の深雪かな

つくしんぼ

菅野蒔子

時刻表手袋の手で拭ひ読む
春寒や野の端のわがみのほとり
毛糸編む手の休みなし戻り寒
啓蟄や宥めきれなきむしもゐて
石清さん中清さん亡し鳥雲に
母の忌は彼岸の入りよ孫二十歳
途中下車の自問自答やつくしんぼ

冬ぼたん

堺　昌子

神苑の満を持したる冬ぼたん
思ひ出の夫との道や梅真白
菩提寺や土押し上げて蕗の薹
風花の参道粛と嫁御寮
初午や音のくぐもる笙の笛
遅咲きのかをり失せざり豊後梅
流れ藻の寄する浜辺や鰆東風

余寒

西川みほ

寒椿点る風蝕著き崖
身震ひのごと神木の雪しづる
くさめして棘もつ言葉呑みにけり
魚板打つ音の沁み入る余寒かな
麦の芽を誘ひ出したる山雨かな
つくばひに日の粒散らし春来る
話好きの主(ぬし)につかまり春炬燵

黄水仙

森清　堯

寒明の光となりて発つ鷗
食膳の鮑の器春立つ日
潮騒の届く築山黄水仙
春光や浜一面の干物の香
入れ替はる風の新し柳の芽
とぶやうに園児らつかむ春の雪
路標にも海抜表示冴返る

初蝶

森清信子

さみどりのしづくをとどめ蕗のたう
芽起こしの雨の切岸遠汽笛
一斉に飛び立つ雀風光る
初蝶の音なき調べ告げてをり
耀終へて午後冴返る魚市場
朝日影屋根替の茅積まれたる
こちこちに固まる砂糖余寒なほ

青炎集

横浜　川村亘子

散りつつも紅あざやかや冬牡丹
箱書に父の筆跡古雛
追ひ風につい小走りぬ春の闇
昨夜雨の今日は良き日や桜餅
春満月遠き二胡の音聴き澄ます
ゆるやかにたゆたふ雲や万灯日

千葉　鈴木礼子

雛の夜の雨の厨の酢の匂ひ
菜園は鳥の餌食や寒き春
雨もよひ花菜明かりの村の辻
首里城の朱にまみれぬる春日傘
玻璃越しのじんべい鮫や長閑なり
ひめゆりの洞窟のぞく落椿

小川玉泉選

千葉　岡井マスミ

借畑の畔にさづかる蕗のたう
青空や眉の高さの梅匂ふ
白梅や鉤形道の城下町
五分咲きの紅梅囃す笛太鼓
天神の踊り場多き梅の坂
踏青や渡らずにゆく橋二つ

横浜　外山生子

葉牡丹の茎立ち兆す日和かな
かたかごに硬さの残る風絡み
紅白梅並びて分かつ空の蒼
怠らず雛飾りし五十年
足場組む鳶職若し木の芽風
乳母車の稚の片言犬ふぐり

横浜　戸田澄子

切株の増えし林や冴返る
落椿ひつそり眠る雑木林
何ひとつ置かぬ文机春の塵
梅が香に老の介護の車椅子
老犬と日々三千歩青き踏む
庭の木々囀りこぼしをりにけり

横浜　杉本裕子

人馴れの鴨の集まる河川敷
住み慣るる町の新たや雪の晴
静けさや雪踏み締むる靴の音
春めける色を掬ひてビーズ挿す
水音の高し中洲の猫柳
風ひかる干されて白き稚のもの

横浜　新堀満寿美

早春の光遍く柞山
手を摩るのみの看取りや春兆す
春疾風てすり頼りの歩道橋
夫の忌や寺院を覆ふ春の雪
黙もくと翁耕す土黒し
ふらここを漕がずに話す媼かな

横浜　田村加代

膝折ててつくづく眺む犬ふぐり
スーパーに桃色あふれ雛の日
老梅を支へる丸太新らしき
老梅に触るるや昨夜の雨こぼる
中庭や目白のこぼす梅の白
老松の根締めたんぽぽ咲き満ちぬ

横浜　高橋明

若衆の木遣を習ひ春隣
春いまだ上野の寄席の艶話
天平の甍の反りや帰る雁
引鴨や磁針の北を指すがごと
三階の木造湯宿春炬燵
指笛や駒呼ぶ牧の陽炎へる

横浜　谷貝美世

湯宿まで雪の回廊九十九折
屋根の雪どさりと塞ぐ厨口
まんさくに風の柔らぐ山の宿
路地奥の藁被る井戸や春の雪
ひとり来て河津桜の旅愁かな
春泥や巫女緋袴にはね上げて

耕土集

春の雪た走る音に目覚めける　横浜　北郷　和顔
春泥を足裏に付けて子の無邪気
紅梅に野梅の香り勝りけり
モカを挽く今朝の珈琲春寒し
大地震の鎮魂の日や春の雁

大木の山茱萸の花空青し　東京　石井　雲雀
鉄骨を晒す陸前黄水仙
被災地の味噛み締めて若布食む
春林や焦げ跡残す震災地
花ミモザレディスランチのレストラン

ひとときを憩ふ水辺や猫柳　横浜　長田　厚子
春キャベツ包むや里の新聞紙
泥付きや夫の摘みたる蕗の薹
まんさくや踊り子のごと咲き満ちて
春めくや動き出したる雑木山

松本三千夫選

春浅き土掻く鋤の音粗し　三鷹　小林　清彦
チャルメラの音色恋しき余寒かな
鳥帰る海原高嶺きつからむ
いろかたちかをり賞でたる梅見かな
春一番鎌倉街道まつしぐら

三寒の午後に覚える微熱かな　草加　泉　和美
朧夜の残り香淡し昇降機
雛愛づる園児らに雛立ちさうな
公園の改修遅々と柳の芽
工事場の踏み乱されし春の泥

山茱萸の花ちりばめて空のあり　横浜　宮地　静雄
足摺の岬鎮まり玉椿
四万十の川の移ろひ春霞
バス停のおかめ桜や空の青
春菊買ふ産地を選ぶ世となりて